

出題傾向の 解説&解答の ポイント

2019年度 一般推薦I期【専願】【併願】の 「英語」と「国語」を詳しく解説!

英語

出題形式

本日程の試験問題は、文法・語法問題1題、会話文問題1題、整序英作文1題、英文読解1題の大問4題で構成され、問題数は25問である。すべてマークシート方式で、選択肢の数は問題によって異なる。試験時間は国語と併せて60分であるため、30分を目安に解答時間を見積もることとなる。目安時間を考慮しても、無理なく完答できる問題数であると言える。第1問は、文中の空所補充形式で、基本的な文法・語法、語彙、熟語の知識が試される。第2問の会話文問題は、連続する二人の会話内に空所が五か所あり、五つの選択肢から適切なものを選ぶ形式である。会話特有の表現に関する知識よりも、文脈を的確に理解する力が重視されている。第3問は整序英作文問題で、和文の意味に沿って英文を完成させるために、空所内の四つの選択肢を並べかえる問題である。主に基本的な文法、熟語の知識が問われている。第4問は300語程度の英文に関して、語彙(語義選択、アクセント)、指示語解釈、内容一致などを問っている。文章で用いられている語彙は、主に高校初級～中級レベルであるため読みやすい。設問は、主に語彙に関する問題であり、基本文法の知識を活用する問題の作りから考えて、基本的な文法と語彙の運用を問う比重が非常に大きいことがわかる。

解答のポイント

全体的な難易度は、高校英語基礎～標準レベルだと言える。対策としては、高校で学習する語彙、熟語、文法・語法などの基本事項を、不足なく身につけることが求められている。それでは、各大問の特徴を踏まえて対策を考えていこう。

第1問では、基本的な文法・語法などの知識と運用力を試している。そのため、まずは授業で学習したことの復習を徹底し、学校で使っている文法中心の問題集などを繰り返し解き、その後、問題集などを用いて、基礎～標準的なレベルの問題に慣れておくことが必要だ。

第2問の会話文問題は、会話特有の口語表現よりも、文脈理解を試している。空所に入る表現をなるべく自分で推測した後で、空欄の前後を確認して、どのような種類の文が適切かを考えながら解こう。会話のつながりをきちんとつかむことが、最大のポイントである。

第3問の整序英作文では、和文が与えられているため、空欄外の英語に対応する和文の部分を削除してから、解答にとりかかるとよい。動詞や、動詞に関する表現が多数出題されているため、第1問と同様に、繰り返し文法中心の問題集を解くことが手始めの対策である。その上で、SVOCのつくり方をきちんと理解し定着させ、テキストなどで見かけた熟語をおさえておくさらによい。

第4問で出題される英文はそれほど長くはなく、語彙も易しめであるため、取り組みやすいが、入試対策用基本～標準レベルの単語・熟語帳を完成させておく必要がある。英文を読むときは、音読することが望ましいが、英文を読むのが苦手な受験生は、音声付きのテキストがあれば、流れてくる音声を頼りに読むとよい。少しずつ英文の難度を上げ、最終的には入試標準レベルの文章を読むことができる力を育てるとなおよい。

国語

出題形式

全体で大問が六問。第1問～第4問が現代文、第5問～第6問が古文の出題である。大問ごとの設問数は少なく以下の通り。なお、すべて五者択一のマーク形式である。

第1問は、問題文が2100字程度、設問が二つ。問1が漢字問題6つ、問2が内容合致問題であった。第2問は、問題文が2060字程度、設問が3つ。すべて空欄補充問題。問1が10字程度の語句の空欄、問2が熟語の空欄三箇所の組み合わせ、問3が接続語句の空欄補充問題である。第3問は、問題文が1180字程度、設問は一つ。中程の形式段落4つの整序問題である。第4問は、漢字の読み(の間違っているものを選ぶ)問題が5問。現代文の問題は、問題文の内容も標準的なものであり、設問も、いずれも基礎的な学力を問うものであり、難問はない。

第5問は、150字程度の文章に、参考現代語訳が付けられ、設問が4つ。古語の意味、空欄補充問題(係り結びの法則の知識で解ける)、傍線部の解釈、和歌の心情を問う問題が出題された。第6問は、短文の中で傍線部の意味(2～5字)を問う問題が4問。いずれも古語の知識や基本的な文法知識があれば選べる。古文の出題も、基礎的な知識を問う問題がほとんどである。

解答のポイント

大問が6問と、多いとはいえ、問題文はいずれも比較的読みやすい文章であり、設問数も少なく、知識に関する問題が中心で、平易なものが多い。時間が足りずに焦るということはないだろう。

現代文(第1問～第4問)は、17のマーク数に対して漢字の問題が11個である。まずは、漢字の問題集に地道に取り組むと共に、普段から辞書をこまめに引き、語彙(い)力をつけること。漢字問題は「覚えていないから解けない」よりも「この言葉知らないから分からない」の方が多くは必ずである。空欄補充問題や内容合致問題は一般的な設問形式である。基礎的な現代文の問題に取り組めば良い。第3問の段落の整序問題はやや難しいが、まずは接続語句や指示語に着目し、「この二つは確実にX→Yの順序」という核をつかまえ、それによって選択肢を絞り、残った選択肢のどれがいちばん論理がつながるかを検討すればよい。また内容合致が苦手な受験生は、まず選択肢にざっと目を通しておき、問題文を読みながら似たような箇所に出会う度に、本文と選択肢を見比べるという方法も有効である。

古文(第5問～第6問)はほとんどが基礎的な知識を問う問題である。第5問の問題文には現代語訳がついている(もちろん傍線部の箇所は訳がついていないが)、第6問は短文による出題なので、本格的に長文を読解することが求められているわけではない。三百語程度の単語帳などで古語の知識を身につけるとともに、基礎的な文法事項(用言の活用、助詞、助動詞、係り結びの法則など)をマスターしておくこと。ただ単純に項目だけを暗記するのではいけない。古語については例文の中においてその語がどんな意味になるのかを押さえて行くこと。助詞、助動詞も実際の例文のなかでどのように使われ、どのような意味、訳し方になるのかを確認すること。